

【1】実践事例

【2】タイトル：連絡用の手段としての掲示板の活用---オンライン伝達サーバの制作と実践---

【3】概要

- ・校内イントラネットとパソコンを利用したオンラインによる伝達手段の開発。
- ・Web アプリケーションの形で提供することにより、メンテナンスやインストール等の作業を簡略化ならびにインターフェースの単純化をねらう。

【4】キーワード：校内ネットワーク イントラネット 掲示板

【5】学校区分：高等学校

【6】学年：

【7】教科：

【8】学校名(URL)：高知県立安芸高等学校 <http://www.edu.net-kochi.gr.jp/home/aki-h/>

【9】授業者名：

【10】授業実施期間(月日, 時間)：

【11】単元・題材名：

【12】単元の目標

【13】メディア活用の意義

学校現場では日々、大量の伝達事項が教員と生徒の間を行き来している。行事日程や時間割の変更、課題提出の催促、模試の日程、生徒の呼び出し、ボランティア等の校外行事への参加呼びかけや案内等、おびただしい伝達事項と数多くの紙がホーム主任や伝達委員といった生徒を通じて飛び交う。

安芸高校での従来の代表的な伝達方法は、

- 1)職員室にある各教職員別の個人ボックス(私書箱)に文書等を投げ込む。ホーム主任は自ホームの生徒への伝達事項がある場合、放課前のSH(ショートホーム)で生徒への伝達を行う。
- 2)職員室前にある各ホーム別のボックス(私書箱)に文書や課題(返却分も含む)を投げ込む。各ホームで割り当てられた伝達委員(生徒)が毎日、決まった時間に自ホームの伝達ボックスを覗き込み、配布物等をホーム教室へ持ち帰る。
- 3)職員室前にある伝達黒板に教職員が伝達事項を記入する。日程の連絡や時間割変更等はこの黒板上で伝達される。各ホームで割り当てられた伝達委員(生徒)が毎日、決まった時間に伝達黒板の内容をメモにとってホーム教室に帰り、教室後部の黒板等に転記する。

というものであり、様々な伝達が様々な方法で行われていた。これは情報が些か交錯している状態でもあり、そのため、伝達の重複や抜けが生じることも少なからずあったように思われる。そこで、こういった状況を合理的な手段でまとめていくことも情報処理の一つであり、また情報化の利点ではないかと考え、校内イントラネットとパソコンを利用したオンラインによる伝達手段の制作を試みた。伝達事項が多過ぎてホームで大事な話をする時間がないと嘆くホーム主任の意見もあり、紙や時間が節約されてなおかつ簡単に使えるということに重点を置いた。

新しい伝達手段には、本校に敷設されている校内ネットワークとパソコンを使用する。本校は現在約 150 台のパソコンを保有し、それらの全てが校内ネットワークに接続されている。職員室や電算室、マルチメディアルーム(パソコン教室)といった大規模な部屋はもとより各ホーム教室にも1台ずつパソコンを設置してあるので、日々の伝達には各ホーム教室のパソコンが利用できる。

つまり教職員が職員室や準備室のパソコンからオンラインで伝達する事柄を生徒やホーム主任が各ホーム教室のパソコンで確認・周知する、というイメージが思い描かれた。

全ホーム教室に向かって一斉に伝達する事柄はインターネット上の電子掲示板のような画面で、また各ホーム別に個別に伝達を行いたい場合は電子メールのようなピンポイント伝達も可能なように、更に操作やメンテナンスも極力簡単になるように、といったいくつかの希望条件から、

- 1) 情報の一元化-校内ネットワーク上で稼働する WWW サーバ(校内のみ)を利用する。
- 2) 操作やメンテナンスの単純化-各端末にインストールされた特定のアプリケーションを使用するのではなく、全ての機能を Web アプリケーションのかたちで提供し、教職員も生徒もブラウザ1本だけで作業が完結する環境にする。
- 3) 伝達事項のデータベース化-伝達事項の中には後々の統計作業等に関係してくる内容もあるので、全ての内容を記録し再利用可能にする。
- 4) 伝達黒板のオンライン化-職員室前の伝達黒板を全校公開型の電子掲示板として設計する。
- 5) 伝達ボックスのオンライン化-各ホーム別の伝達ボックスを HotMail のような Web メールに置き換えて設計する。

といった設計概略が算出され、それらに従って本校独自の「オンライン伝達サーバ」(以下「伝達サーバ」)を制作することとなった。

前項の概略の通り、「伝達サーバ」は校内イントラネット上で稼働する Web アプリケーションとして提供される。

Web アプリケーションの最も身近なものとして Microsoft 社が提供する HotMail があるが、これの特長は、ホームページの操作と同様の比較的単純なインターフェースで電子メールの送受信に関する作業が全て行えるという点にある。また、やりとりしたメールやアドレス帳等の情報は全て Microsoft 社のサーバに蓄積されて行くので、使用する端末が変わった場合の再設定やデータ移行等の問題もない。

通常、電子メールの利用は各端末にインストールされた電子メール専用のソフトウェアを使用することによって行われるが、これは個人別の設定が端末ごとに必要であったり、常に使用する端末が固定されたりと制約が多く人事異動等に際してのメンテナンス時間も要求される。特に本校のように教

員一人につき1台のパソコンを持たず、1台のパソコンを数人の教員で共用するような環境ではこの問題は顕著にあらわれる。このような場合、各端末ごとのインストールや設定が必要でなく、ブラウザ1本で操作も単純化されたWebアプリケーションを利用することの効果は大きい。極端に言えば、どこでも空いているパソコンがあれば常に同じ環境で作業することが可能になる。

【14】メディア環境

【15】単元の指導計画

【16】授業展開

【17】学習活動の実際

【18】授業の成果(生徒の反応、メディア活用の効果等)

【19】ワンポイントアドバイス(今後の課題等)

ソフトウェアをWebベースで開発することによるインターフェースの単純化やメンテナンスの省力化によって現在のところ順調に利用されている。試行期間を経て2000年の5月からは本稼動に入り、従来の伝達黒板は廃止された。伝達ボックスについては添削等の課題がやり取りされる場でもあるという性格上、完全にオンライン化することは不可能であるが、それでも以前よりは紙を媒体とした伝達はだいぶんと減少したように見受けられる。

今後の課題として、

- 1)現在、伝達委員が職員室前の出欠黒板に毎日記入している各ホーム別の出欠状況の報告をオンライン化し、集計を自動化
- 2)現在、教務部が手作業で集計・連絡している授業日数やロングホーム時数の計算を自動化
- 3)現在、各ホーム主任が手作業で集計している生徒各個人の出欠状況の入力をオンライン化し、集計を自動化
- 4)現在、各教科担任が手作業で集計している各授業の出欠状況の入力をオンライン化し、集計を自動化

といった機能の追加が期待されている。これらは現在開発の途中にあり、来年度からの試行・導入を検討している。これは一元化された情報を整形・再利用するという次の段階へ進む要求が高まっている状況であるとも言えるだろう。

【20】参考資料・参考URL など: